魔法戦記リリカルなのはＦｏｒｃｅ～世戦の軌跡～

岸辺　翔

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
魔法戦記リリカルなのはＦｏｒｃｅ～世戦の軌跡～

【Ｎコード】
Ｎ２０８７Ｘ

【作者名】
岸辺　翔

【あらすじ】
平和の為に自らに関わる全ての記憶を封印した死神と、戦争を根絶するために戦火を生み出す狼と、過去の事故によって人生を歪まされてしまった少年と、己を救ってくれた思い人を助けるが為に戦う少女たち４人が描く、美しくも残酷な戦いの記録。「君はなんのために戦う？」　「お前に命を奪う覚悟はあるか」　「どうして、貴方たちは……！？」　「大丈夫、私もいるから……」　――――今再び、戦乱の刻が動き出す――――

プロローグ　Alle Started

「風が……人の心が、荒れてる……。なにか良くないことが起きそうだね……」

「なんだ、また予言か？」

「予想だよ。でも、当たりそうで嫌だなぁ……」

時空管理局・局長室。
そこで2人の男が話し合っていた。

「……で、今回の予言は？」

「……狼と、風と、閃光と、死神と、魔王と、牙と、兎と、夜天と、猛毒と……。なんだか、嫌な予感しかしないね」

「死神はお前だとして、狼や牙、ましてや猛毒……？」

「まあ、僕はみんなを守るだけだから。やることなんて変わらないよ」

漆黒を思わせる長髪をなびかせながら、男は小さくため息をついた。
まるで鬱陶しそうに、それでも満足そうに。

「今のうちに策を考えよう。新造次元航行艦の準備を急ごうか」

「了解だ。お前も戦うのか？」

「必要とあらばいつでもね」

「お前らしいな」

暗い室内で残響した、２人の声だけが怪しく残った。

†★†★†★†★†★†★†★†★†★†★

「……新たな戦火……か」

暗い、闇の底。
明かりなど何処にも無く、ただただ闇だけが続く空間。
これは……俺が刻限を向かえ、世界から排除され、また次の世界へ行くときへの繋ぎ空間。
また、俺は借り出されるのか。世界へと。

「様々な世界を見てきたが、次はどうなることやら……」

新たな戦い。
それが何を意味するのか。

そして、それこそが過去と現在と未来の交わる未知の世界。

死神と言われし少年と、銃騎士と呼ばれし狼と、猛毒と呼ばれた2人の少年少女の物語――――

プロローグ　Ａｌｌｅ　Ｓｔａｒｔｅｄ（後書き）

どうもこんばんは、岸辺です。
今回は予告無く投稿させていただきました。
この前投票を行いましたが、あれは悪く言えば隠れ蓑、よく言えば本気です。
というわけで、銃騎士シリーズを今後ともお願いいたします！　では！

狼・第1章　懐かしの世界

「閣下、不可解な救助要請が来ています」

「……見せろ」

次元の海に存在しているＯＨＮ本社の総統室。
そこで俺は部下から一枚の紙を受け取った。

「次元座標１００－ＣＤＡ２Ｇ－２０３ＫＳ……？　詳細は来ていないのか」

「現在受信中です。至急伝達させますか？」

「……いや、俺が出向こう。自分で確認する」

椅子から立ち上がり、無駄にデカい机を避けてドアまで歩く。
この部屋の設計は俺がやったわけではないので、何故か『閣下に相応しい部屋にしよう！』とかそういうノリで、クソデカい部屋と机になったわけだ。
マジでふざけんな。

「では、人払いを？」

「……ああ、頼む。それから双転移ポートの起動を頼む」

「ハッ」

「……しかし、次元座標が１００番台……？　あまり認知されていない座標だが――」

＜――助けテ！＞

「――ッ……！？」

激痛と共に、何者かの声が俺の頭の中で響いた。
その痛みはこれまでの経験で語れぬほどのもので、体に力を入れることも適わず膝を付いてしまう。
これは……なんだというのだ。銃弾も、重力も、大気も、熱も……このような痛みを生み出さない。頭の中身全てをミキサーでかき混ぜられ、強力な電気を流されたような……鋭くも鈍い痛み。
俺でなければショック死だろうな……。

「閣下！？　一体何が！！」

「まて……話しかけるな……」

＜苦シい……痛い、ヨ……！＞

「ぐァッ……！　っく……」

「えい、衛生兵！　衛生「黙れ！」あっ、も、申し訳ありません……」

「……ハァ……ハッ……。汝に問う、お前は……何処にいる」

＜もういヤだ……誰も、傷つけタくない……！＞

「ああ……そうだな。その悲しみから逃れただろう。だから教えろ……お前は、どこに……！？」

＜来ちゃダめ……みんな、死んじゃう……＞

「……悲しい思いを続けてきたのか……？　その連鎖を食い止めるのはお前自身だ……俺はその手伝いしかできん……。――おい！　逆探知が完了した！　今すぐ双転移ポートの駆動を切れ！　俺が直接飛ぶ！」

「ハッ！」

伝達兵が双転移ポートを遠隔停止させたのを確認し、体を駆け巡る魔力を胸の一転に集中させる。

頭痛が止まないが、それでも逆探知だけはできた。この声が次元間通信を利用した精神感応だったのが幸いしたな。

次元座標は先ほどの報告にあった場所だ。それほど苦労もしないはずだが……。

――――ッ！？

「銀十字！？」

【……ＥＣ（エクリプス）因子の反応を感知。強制転移を開始】

突然俺の目の前に現れた、一冊の魔導書。
ＥＣ因子の感染源でもあり、俺の第二のパートナーだ。

「待て！　俺には任務が……」

【精神感応お発信地点と報告。……決定権を譲渡】

「なッ……わかった。転移しろ」

【双転移発動。転移時の肉体保護としてディバイダーの起動を提案】

「……承知だ」

【認証完了。ディバイダー起動と同時に転移開始】

左手にＤＥＳＥＲＴ　ＥＡＧＬＥ　１４ｉｎｃｈを模したＥＣ兵器（ディバイダー）が現れると同時に、俺の体を部分的に機械質の鎧が包んだ。
左腕両足に展開されるこの鎧。銀十字いわく、これは『俺にもっとも適応した姿』らしい。よくからん。
同時に俺を浮遊感が襲い、目の前の景色を一変させた。

「……弾薬は充分、武装も難点は無い……。しかし、ここは―――」

ここはどこだ？

大気に混ざっている原始成分からして、ここが鉱山であるのはわかるが……。
あの半壊した遺跡に様なものも気になる。

「銀十字、ここはどこだ」

【転移先。ルヴェラ鉱山遺跡と断定。救難信号のあった地点から半径２００メートル圏内であり、かつその４時間前へ時差転移を完了】

「時差転移までやったのか……。まあそれは構わんが、信号発信地（ポイント）から２００メートル圏内……？　……って、あれしかないか」

誰がどう見ても怪しさ満天の鉱山遺跡。
俺が到着したのはその上にある崖……だな、畜生。銀十字め、厄介な場所を選んで転移しやがったな？

「……Ｊａ．野宿でもするか」

【近辺に食用可能生命体の反応なし】

「……お前、何処までひねくれている？」

【現状通りには】

「……そうか。正常そうで何よりだ」

片腕だけでなんとか岩を登り、視界を拡大表示（ズーム・ヴィジョン）に切り替えてあたりを見回す。
夜だからか明かりが目立つな。おかげで暗視（ナイト）を使わずに済む。

「小さな町に……草原と……山脈。さしずめ自然保護区域か」

【光景から第２３管理世界ルヴェラ文化保護区と算出。正式照合の可否判断を譲渡】

「曖昧で構わん。それよりも全周警戒をしろ」

【受諾（Rog）】

パラパラと銀十字からいくつかのページが飛び出し、あたりに散らばっていく。
これらは索敵レーダーのようなもので、最高で約１００億ものページを散布できる。しかも攻防兼用。
連ねれば刃にもなるし、集約すれば盾にもなる。まさに攻防一体の武器なわけだが――

「……性格がこれだからな」

【なにか？】

「いいや……気にするな」

【……索敵範囲を半径３キロに拡張。危険分子なし】

「3キロて……やりすぎだ。1キロ圏内でネズミ一匹のこらず報告しろ」

【索敵範囲縮小。動体を複数確認。総数3。内一体は無機物と判定】

「無機物で動体……まるでデバイスだな」

【視覚変更。拡大表示から透過視覚へ】

「お、おい、勝手に変更を……って、クソ……」

勝手に変更された視覚で確認してみると、すぐにその姿を見ることができた。

15，6歳くらいのガキと、その隣で浮遊するちっこい無機物。その反対側には何処からかやってきたであろうネズミ。

……まあ、確かにネズミ一匹残らずと言ったが……。

しかもガキの方はまっすぐに俺の方へ来ているし。危険分子反応は無いから平気だと思うが……。

念には念を、だな。銀十字には隠れてもらうか。

「動くな。両手を肩まで挙げて膝をつけ」

特殊な歩法と魔力運用で瞬間的に音速を超え、ガキの後ろからDESERT EAGLE 14inchを突きつける。

その間に視覚の通常に戻し、ハンマーも起こした。

「……あの、俺……なにか？」

「今のところはなにも。しかし今後どうなるかはわからん。まずはここにいる理由を訊こう」

「長期旅行での観光です」

「証拠は」

「パスポートと、今までの写真くらいなら……」

「親権適用者は誰だ」

「保護者なら、います」

「名は。ＩＤはわかるか」

「管理局の人で、名前は———」

……管理局、だと……？

「待て。管理局とは、よもや時空管理局か」

「え、ええ、まあ」

「……そうか、続けろ」

「えっと、スバル・ナカジマ。特別救助隊（シルバー・レスキュー）です」

「――――ッ……！　……そうか。あいつの……」

……しかし、なぜあいつの名が出てくる？
俺はもう、フェイトやなのはたちが生きている『あの世界』に変えることはできないはずだが……。

「……すまんな。尋問のようなことをして。楽にしてくれ」

「軍人ですか？　そんな質量兵器（あぶないもの）を持ってるってことは、それなりの違法企業だと思うんですが」

「法は法にあらず。一応管理局からの許可は得ている」

「管理局が質量兵器を許可……？」

「細かいことは気にするな。この時間にここへ来たということは、お前もあれが目当てか？」

「……はい。さっきも言ったとおり、観光目的で」

「ならこの時間からいくのは避けたほうがいい」

そう言ってＤＥＳＥＲＴ　ＥＡＧＬＥ　１４ｉｎｃｈを右脇のホルスターに収め、魔力で作った小さな炎を明かりにする。
野宿でも共にどうだ？　と誘ってみると、ガキは素直に頷いた。

「名を聞いていなかったな。俺のコードネームは銀狼（シルバーウルフ）。お前は」
「トーマ、トーマ・アヴェニール。１５歳です」
「で、そっちのデバイスは」
「どうも、スティードと申します」
「非戦闘用デバイス……か。しかも特注」
「はい、スゥちゃんがくれたもので」

……しかし、今は新暦何年だ？
それがわからねば今後の行動も変わってくる。

「時にトーマ、Ｊ・Ｓ事件を知っているか？」
「それって６年前の大規模犯罪ですよね」
「ああ。あれは酷いものだった……。まあそれはいい」

そうか、６年前か。
ということは、なのはやフェイトは２６歳という事になるな。
むゥ……そろそろ抜かれるぞ、俺。

「食料の確保はできているのか」
「はい。銀狼さんのほうは？」
「問題ない。元々１週間くらいの断食ならば耐えられる」
「うへぇ……想像もできない」
「しなくていい。それよりも……設営や寝具はあるのだろうな」
「まあ、自分の分くらいは……」
「俺の心配はするな。砂漠だろうが沼地だろうが、俺は何処にでも適応しうるようになっている。傭兵を甘く見るなよ」
「傭兵？　傭兵って言ったら犯罪じゃ」
「ふむ……そうだな、正式名称で言うと『防衛用装備を持った個人（プライベート）オペレーター』だ。よって軍属ではない」
「い、言い回しの屁理屈ですよね……それ」
「法律なんぞそれでいい。穴の無い鉄壁など存在しないのだからな」

そのような他愛の無い雑談をしながらも、着々と準備を進めていく俺とトーマ。
コーヒーを出された時は流石に礼を言わざるを得なかったがな。
そろそろ４時間経つかと思ったそのとき、再びあの声が聞こえた。

内容は先ほどと同じものだが、痛みはそれほどでもない。――……ただ、トーマにも聞こえているようで、痛みに苦しんでいた。

「その痛みを受け入れろとは言わん。慣れろ」

「まさか、貴方にも……！？」

「ああ。しかし、この程度ならば問題ない」

――トクン……

心臓の鼓動と同期して、右目が急にうずいた。

俺の右目は視力を失っている。しかし、その代わり以上の能力を得ている。

その１つが――ＥＣ因子（エクリプス）の核（コア）だ。これは非常に厄介なものだが、俺の仕事上役に立っているのも確か。

ＥＣ因子は俺に力を貸し、俺は体を貸す。そうしてやってきたが……まあ、時折不便もある。

色々と、な。

「……行くのか」

「……助けてって、言ってます」

「……そうか。なら、俺も力を貸そう」

声がしたので遺跡を見てみれば、そこにはコルト　Ｍ１６と重装甲

を装備した兵士が数人巡回していた。
それに白衣を着た研究者らしき人物が複数と、装甲車両に物資搬送員が数名。
……戦力はたいしたことないな。

「お前はそこにいろ。一撃で全員気絶させる」

「でも、人数が」

「これでも隻腕で戦ってきた経験はある。１キロ圏内のこの距離で外すわけが無かろう」

右袖に左手を突っ込み、中からベネリ　Ｍ３　スーパー９０を抜いて構える。
同時にレアスキルであるトリガー・ハッピー――――魔力を弾丸として形成する能力――――を発動させ、無数のＴＡＳＥＲ　ＸＲＥＰ弾を形成した。
ＴＡＳＥＲ　ＸＲＥＰというのは、まあ簡単に言うと射出型のスタンガンだな。性格にはその弾丸だが。
俺が今構えているＭ３も、弾丸は１２ゲージのＴＡＳＥＲ　ＸＲＥＰ弾だ。本来射程は５０メートルほどなのだが……まあ、そこは俺の技術で云々。

「作戦許容時間は３分。できるか」

「……がんばります」

「了解（コピー）。目標補足（ロッケン・ターゲット）……発射（ファイア）ッ」

合図と共にトーマが走り出し、その後ろから幾多ものＴＡＳＥＲＸＲＥＰ弾が発射されていく。その全ては警備員や研究者たちの首筋を捕らえ、確実に気絶させていった。

っと、俺も後を追わねばな。俺がここに来たのは元々悲鳴を主を助けるのが目的だ。

Ｍ３のスリングを肩に掛け、崖を一蹴りで飛び降りる。すぐにトーマに追いつき、中にいた研究員や武装警備員を全てＴＡＳＥＲ　ＸＲＥＰ弾で気絶させていく。

なんだ、えらく薄い軽微だな。見た目は重要そうだったが……。

「……この研究……もしや……」

「知ってるんですか……？」

「見覚えがある。この肉塊、それにこの気配……よもやＥＣでは」

「Ｅ……Ｃ？」

「大分ヤバい方向ということだ。お前はあまり首を突っ込まないほうがいいかもしれん。ここから先に進むと、二度と後戻りはできんぞ……」

幾重もの電子ロックで保護された巨大な扉を前に、俺はＭ３を構えなおした。

この先から超えの気配がするが、陽動の場合もある。警戒するに越

したことは無い。

「……でも、助けてって……言ってます」

「……そうだな。なら、突入(いく)しかないなッ！」

厚さ３０センチ程度の扉を蹴破り、瞬時に進入してＭ３を構える。
敵影無し、民間人無し、生命体反応１――――クリア！

「要救助者１名を発見。トーマ、俺が見張りをしている間に救出(セーブ)できるか」

「は、はいっ」

フォアエンドを壁に引っ掛けてコッキングし、左腕１本で構える。
見張り兼護衛という立場上部屋から出ることはできない。できうるのであれば通路に出たいが……そうもいかん。
後ろではトーマの短い悲鳴も聞こえるし、なにより……あいつは、自ら？こちらの世界？に来たのだ。俺がとやかくいう筋合いは無い。

「トーマ！　まだか！」

「その、手錠が中々外れなくて……」

「チッ……。どけ、撃ち壊す！」

Ｍ３を壁に立てかけ、右脇のホルスターからＤＥＳＥＲＴ　ＥＡＧＬＥ　１４ｉｎｃｈを抜き、貼り付け台に拘束されていた女の手錠と足枷を撃ち壊す。
早くしてくれ、そろそろ３分が経過するぞ……！

『――――警告、警告。感染災害の危険発生』

「奴らに感づかれた！　救出（セーブ）はまだか！」

「あ――――大丈夫です！」

「早く脱出を――――クソッ！」

バシンッ！
扉が重厚な魔力障壁に変わり、さらには天井からスプリンクラーのような突起が出てきた。
こいつァ……まさか……

『これより熱焼却処理を開始します。近隣ブロックの職員は至急非難を』

「やはりか……！　トーマ！　魔法は使えるか！」

「一応、基本的なものは！」

「なら全力でシールドを張れッ。念のためこいつも使え」

そう言って着ていたロングコートを投げ渡し、被っているように伝える。

俺の軍服は耐弾・耐熱、耐刃の特殊繊維でできている。多少の熱なら緩和してくれるだろう。

仕方ない……ＥＣ因子（エクリプス）、使うか。

『カウント６』

「よもやこれに頼らねばならんとはな……」

『５――４』

「トーマ、準備はいいか」

「はいっ」

『――３』

「はァ……Ｅ－Ｃディバイダー、スタートアップ！」

【Ｅ－Ｃ　Ｄｉｖｉｄｅｒ　Ｃｏｄｅ－０００．Ｓｔａｒｔ　Ｕｐ】

俺の左腕と両足を機械的な鎧が被い、さらにくるぶしまである長いロングコートが現れた。

なにやら鎖帷子（くさりかたびら）のように鱗状になっているし……何故急に装備が変

わった？

『2――――1』

「――――っ！」

＜誓約（エンゲージ）＞

『――――0』

「――――なんだ、今の波動は！」

大量のガスと火炎が舞い散る中、俺は『俺が良く知る反応』を感知していた。

部屋にあった設備は全て溶けているが、無論俺に傷は無い。しかし、今の反応はまさか――――！

「……ッ……！　やはりか……！」

急いで振り返ったそこには、予想通りの変化を遂げていたトーマがいた……。

部分的な黒い装甲に、色の変わった瞳。こいつも世界に選ばれてしまったか……。

クソッ。ディバイダーまで起動していやがる。

<Ｅ－Ｃ　Ｄｉｖｉｄｅｒ　Ｃｏｄｅ－０００．Ｓｔａｒｔ　Ｕｐ>

「――トーマ！　そいつ（ディバイダー）を停めろ！」

「ディバイド――ゼロ……」

突如天井に向かって放たれた巨大エネルギー砲撃。
威力は不完全とはいえ、それでも施設を貫通してしまう威力だ。このまま制御不能状態にしておくのは厄介だな。
あまり手荒なことはしたくないが……。

「――ッ！」

瞬時にリボルバー型のディバイダーを蹴り落とし、女を引き離してトーマを床へ押さえつける。
そのまま後ろ手にＯＨＮ特性の手錠をかけ、ＤＥＳＥＲＴ　ＥＡＧＬＥ　１４ｉｎｃｈの銃口を頭に突きつけた。

「声が聞こえれば返事をしろ！　もし意識が無いようであればこの場でお前を殺す！」

こいつはＥＣ因子（エクリプス）に感染した。それは見ればわかる。
だからといってはいそうですかと見過ごすわけにもいかない。少なくとも敵味方をはっきりさせ、今後の処置を伝えねばな……。

「――っ……！？　あ……れ……。俺、なにを……！」

「聞こえるか、返事をしろ」

「え……あ、はい！」

意識が覚醒した瞬間、ディバイダーと鎧は消え去った。
どうやら無我で発動していたようだな……。危険極まりない話だ。

「この場で詳しい話はやめておこう。用件は１つ、お前は今どれだけ？危険な立場？にいるかわかってるか」

「危険な立場……ですか？」

「……その様子では、なんら理解していないようだな。――まあいい。早くこの場から逃げるぞ。奴らが来る」

「あっはい！」

トーマが女を背負い、俺が証拠を消しながら撤退する。
ふむ、そこそこの魔力量はあるみたいだな。そうでなければ女を背負って全力疾走など、そうそうできるものではない。
俺のように基礎を鍛えていれば関係ないが……それでもガタがくる。
しばらく走り続け、山の２合目辺りで小休止を取ることに。

「トーマ、こいつに名を訊いてくれ。お前がEC因子（エクリプス）に感染したのを見る限り、シュトロゼック・シリーズであることは間違い無いだろうが……」

「えと……俺はトーマ・アヴェニール。君は？」

＜リリィ・シュトロゼック＞

「リリィ……うん、可愛い名前だ」

「……妖精（リリィ）……か。また嫌味な名を付けられたものだな……」

「あの、銀狼さん。これからは……」

「なに、宛はある。しかしお前の面は割れてしまっているから、表立った行動はさけることになるだろうて」

「なっ、なんでですか！？」

「先刻、熱焼却処理システムが発動しただろう。あれが発動したということは俺たちがあそこにいたのを視認されて、そして確認をしたということだ。まあ俺はいかような媒体にも姿が映らないから問題ないがな」

「……じゃあ、もしかして……手配されてるんじゃ」

「そう考えるのが妥当だろう」

そう言うと、当然のようにトーマは考え出してしまった。

いくら長期旅行とはいえ、裏(こちら)の世界に首を突っ込んでしまったのだ。後戻りはできないし、今後は世界や組織の連中に狙われることとなる。
俺が傍にいる間はさせんが。

「安心しろ。隠密行動は得意だ。たとえ手配書を回されたとしても逃げられる自信はある」

「……俺、管理局に信頼できる人がいるんです。その人に言えば、きっと保護してくれ「甘ったれるな」んなっ……」

「俺たちは今、管理局の認識で？殺害を認められている？のだ。理由はいくつかあるが、俺たちが『EC因子(エクリプス)』の感染者であるということが大きい」

そう言って右目の眼帯をずらし、蒼の瞳に紅い文様の描かれた右目をトーマに見せる。
EC因子(エクリプス)特有の片翼模様。本来は体のいたるところに現れるものだが、俺の場合は進化の過程で右目にのみ収束してしまった。
おかげで摩訶不思議な能力もあるがな。

「EC因子(エクリプス)って、なんですかっ」

「……詳しくは後に明かそう。今は逃げ延びることと、俺から離れないことだけを考えろ」

「でも、銀狼さんが敵にならないって保障は———」

「……そうだな。だが俺はお前を敵にする気は無い。同じ病にかかったものとして……なにより、シュトロゼックを持つ者として」

シュトロゼック・シリーズ。
それはＥＣ因子（エクリプス）の為に生み出された、人型生命体管制制御（ヒューマノイド・バイオ・セーフティ）ユニットだ。
感染者（ドライバー）と融合・同調することによって火器制御装置（ファイアリング・セーフティ・ユニット）となる媒体を操作するのが主機（メイン）能なのだが……。
銀十字の書が何冊あるのかなど知らんし、少なくとも先ほどトーマも出現させていた。つまり現時点で2冊あるということになる。
……まあ、詳しいことは後々考えるか。ダルくなってきた。

「これ以上留まるのは危険だ。町まで出るぞ」

「……はいっ」

［あの、銀狼殿？］

すすす～、と寄ってきた非戦闘デバイスのスティードが、俺に耳打ちをしてきた。
なんだ、主人に聞かれたくないような話なのか？

「なんだ」

［もしや、ＯＨＮのでは……？］

――ッ……
さすが、デバイスだな。
情報のリンクが早い。

「……俺の素性は伏せておこう。今度のためにも、今の関係を定着させるためにもな」

俺はスティードをトーマに投げ渡し、山道を歩き始めた。

ＯＨＮの総帥、銀狼。
今の俺はその立場でここにいるのではない。
俺は今、ＥＣ因子（エクリプス）に感染した者としてトーマの隣にいる。
同じ病に感染した同胞として、更なる悪夢を生まぬように安全装置（セーフティ）として、呪われた銃騎士として。

――――俺は、世界（キルゾーン）を殺す猛毒となることも厭わんと決めたのだ

牙・第1章　忌まわしき過去

「なのは、例のブツがでたらしい」

「……そう。出ちゃったんだ、あれ」

「……ああ。シグナムからかねがね噂は聞いていたが……ついに表に出た」

「……隼人さんと同じ病気――――」

「EC因子（エクリプス）が――――な……」

重く圧し掛かる重圧。
EC因子（エクリプス）……それは世界を殺しうる猛毒とか言われる病気の一瞬なんだけどな……。
こいつがまたタチの悪い奴で、感染者を人あらざるものにしちまう。
俺の戦友……っつーか、昔から一緒に戦ってた奴もこいつが発祥してな、そりゃもう大変だった。
元々手が付けられない上に異常になったせいで、世界どころか次元を消しちまうかとも思ったほどだ。
そのせいで俺たち管理局でも体制を強化し、感染者は殺害が許可されちまった。ひでぇもんだ。

「俺ぁ情報収集に言ってくる。新しい出現予測地点が割り出せたとか言ってたし」

「気をつけてね、ゆーくん。あの人たちに魔法は通じないし……」
「心配すんなよ。俺たちには――――三銃士にゃあ、隼人(あいつ)が残してくれた高濃度魔力圧縮弾(HMB)がある。EC因子(エクリプス)相手だろうと問題ない」
「……うん、そうだよね。隼人さんが残してくれたんだし、大丈夫……だよね」
「……そういや……あいつが消えてから、もう6年か」
「……どう、してるかな」
「さぁな。俺は銃騎士じゃないからわからないが、きっとどこかで元気にやってるんじゃないのか？」

あいつの事を思い出して暗い顔になってしまったなのはを抱きしめ、ゆっくりと頭を撫でる。
本来俺たち三銃士は消える運命にあった。だが隼人が無茶をすることによって三銃士は生き長らえ、今こうして幸せを掴むことができている。
感謝しても仕切れないが、あいつ自身が望んだことでもあり、そうするしかなかった。
いつだって
あいつのやってきたことはいつだって正しかったが、いつだって間違っていた。けど最期のあのときだけは……俺には他の答えがわからなかった。
コードネーム・銀狼(シルバーウルフ)、本名を隼人という。あいつが銃騎士であり、俺がその三銃士だったことを光栄に思ってる。
それだけ仲が良くて、掛け替えの無い存在だった……。

「……行ってくる。緊急回線だけは空けといてくれよ」

「うん……行ってらっしゃい、ゆーくん」

小さな笑みと共に玄関を出て行き、ガレージに停めてあるバイクに跨る。

日本のメーカーで販売されていたＶＦＲ－１２００Ｆ。ミッドチルダじゃあ車検に通らないのでエンジンをガソリンから魔力駆動に変更しちゃいるが、その独特の音や性能はそのままだ。

向かう先は報告にあった地点。ＥＣ（エクリプス）因子が出現したと考えられている場所だ。

ここから先は管理局からの命令じゃない。俺の独断と、あいつの……意思だ。今もなお一部の奴らによって受け継がれていく、あいつの。

「……頼むぜ、今日も」

［構いません。それよりも……不確定な電波が］

「登録なしか？」

［はい。ただ、ログに該当が］

「発信者および受信者を割り出せ」

俺の第二の愛器、ライジングソウルからの情報を聞きながら指示を出す。
不確定電波だって？　ふざけんな。この緊急事態によぉ……。

［発信者不明。受信者複数。広域電波だと思われます］

「内容は」

［？我、狼なり。墓守たちよ今こそ目覚め、世の断りを我が天秤に？……だそうですが］

「狼に墓守か……。墓守はたぶんＯＨＮのことだな。天国の外側にいる者たち……でもなぁ」

ＯＨＮの奴らに命令を出す奴。
今のところその権限があるのはリィンフォースのみだ。だが狼と名乗ったりはしない。せいぜい闇だ。
となると、考えられるのは１人しかいないんだが……そいつはもういない。消えた。いてはならない。
消えたからこそ今の世界があるし、消えなかったらこの世界は無い。
だからこそ俺が生きてるし、この世界に存在している。

［それと新たな報告書が］

「……内容は」

「ＥＣ（エクリプス）因子と思われる反応が２つ、とのことで」

「なっ、２つだと！？」

さっきの報告にあったのは、ＥＣ因子（エクリプス）と思われる痕跡が１種類あったという報告。
今の報告が本当なら、今現在ＥＣ因子（エクリプス）１つが同時に行動していることになる。とんでもないことだぞ。
１つでさえ苦戦するってのによ……。

「……犯人はわからねぇのか」

［犯行現場に残されていた証拠は２つです。１つは顔、姿の全てが写された映像。２つ目は犯人が使用したであろうＴＡＳＥＲ　ＸＲＥＰ弾です］

「ＴＡＳＥＲ　ＸＲＥＰ？　あれはＩＤが残るはずだろ？」

［いえ……それが、何故か残っていないらしく］

「あの弾からＩＤシートを除去できる人間……？　いるのか？　そんなん」

あの弾は発射時にＩＤシートを吐き出す仕様だ。
それを解除できる奴はそうそういないし、銃弾職人であっても難しいといわれてるほどだ。

「まあ、無駄口叩いても仕方ない……。ライジングソウル、次の予想到達地点は」

［ええとですね……なっ、ここです！！］

「はぁッ！？」

驚きのあまり急ブレーキ。
危ねぇ。ここが山岳地帯じゃなくて市街地だったら事故ってるぞ。
ってか、予測値地点がここってどういうことだ？

［到達予想時間まで残り2秒！　1……ゼロ！］

「いくらなんでも急すぎや———」

ズドンッ！
地響きすら軽がると超える轟音を響かせながら、山の斜面を削り取るような衝撃。
事実、俺の目の前にクレーターが出来上がっていた。ひでぇな。
砂埃が舞っているので、その中心にいる人物の特定はできない。特長さえつかめれば……！

『……やあ、君はこの世界の住人だね？』

「誰だ！　両手を挙げて武器を出せ！」

『それはできないな。僕はまだやることがあるし、なにより彼を助けていない』

徐々に晴れていく砂埃。
腰まであると思われる黒髪に、感情を思わせない雰囲気。
なんだ、こいつは……。気配がまるで読めないし、まるで死にたての死体だ。

「何者だ！」

『……今は、死神とだけ名乗っておくよ。それより君も行くんだろう？　彼の下へ』

「なに……？」

『彼は今も逃亡を続けている。君の足（バイク）でも追いつけるかどうか……。まあ、僕は行かせてもらうね』

「あ、おい待て！」

舞っていた砂埃を一瞬にして消し飛ばし、その男も消えていた。
空を見上げてみれば、そこには黒い翼をはばたかせる何か。まさか……あれが今の男だというのか？

［マスター、次の予測地点が］

「……ああ。わかった。あいつのことは報告書にまとめておいてくれ」

［御意。では案内します］

今のあいつはいったいなんだったのか。
管理局のデータベースにでも問い合わせれば。あるいは、無限書庫にでもいけば乗っているかもしれないが……それはやめよう。
今の気配は敵意ではなかったし、どちらかというと虚無だった。
下手に干渉して敵となられても困るしな。

「敵とも見方ともわからない外部勢力……か。怖いもんだな」

†★†★†★†★†★†★†★†★†★†★†★

「こちら和輝！　至急応援求む！」

『増援は向かわせた！　持つか！？』

「かなりきついっての！」

閃光と、無数の魔力光。

俺たちは魔法を、あいつは銃弾を。
どうやっても拮抗してしまう状況だが、こっちは7人、むこうは1人だ。
数の差では圧倒的に有利なハズなんだが……。

「EC因子が相手じゃ、なぁ……」

EC因子。
俺たちの魔法を全て無効化し、尚且つ絶対的な肉体を手に入れるクソ厄介な病気。
その発症者が相手だ。顔を仮面で隠し、ロングコートのせいで体つきもわからない。
正直、厄介すぎてダルくなってきやがった……。

「HMBの数にも限りがあるし、なにより無駄遣いはできねぇ。なにより威力が高すぎるし、銃が持たなくなりそうだし……」

俺の戦友――――隼人が残してくれた、EC因子に立ち向かうための唯一の方法。
魔力を結合させるのではなく、魔力そのものを高濃度状態で圧縮して弾丸状に形成した銃弾。EC因子でも消されること無く、AMF環境下でもその威力は絶対。
けどあまりに威力が高すぎて、銃がもたないんだよな……。

「はぁ……あいつがいてくれりゃあ……」

消えてしまったあいつ。
んこんな状況ですら一瞬で打開してしまいそうな、それだけの力を持ったあいつ。
……今頃悔やんでも、戻ってくるわけ無いけどな。

『……手抜(ぬる)いな』

「ハッ。そりゃすまねぇな」

『これでも貴様らは世界の駒か……？』

「ざけんじゃねぇよ。こちとらユニゾンもしてねぇんだぜ？」

『融合……か。無駄なことを』

膝まであるんじゃないかと思うくらい長い銀髪を揺らしながら、男が歩いてきた。
魔法は一切効いてない。それにむこうは構えてすらいないが、俺は関係なしにナイフとＰＤＷ―――ＦＮ　Ｐ９０を構えた。
攻撃を仕掛けてくるような気配は無い。むしろ完全に警戒を解いているような……温和な雰囲気だ。

「……こっ、これ以上来るな！　発砲を余儀なくするぞ！」

『……器の小さき者だ』

いつのまにかＥＣ因子（エクリプス）の有効範囲内に入ってしまったのか、俺の飛行魔法が解除されて重力に引かれた。
―――と思ったら、俺は胸倉を掴まれて宙に浮いてやがる。
クソッ！　なんだこいつ。敵意はねぇのに体が震えるぞ……！？

『どうした、怖気づいたか』

「……へッ。ざけんじゃねぇよ」

『フン……その意気や良し。だが貴様は告人とはなれない』

「なに言ってんだテメェ。さっさと離せよ」

『……我は真判者。我が名は狼。全ての頂点に君臨し、森羅万象を駆け巡る者。貴様も告人となりたくば……世界に轟かせることだ』

瞬きと同時に男は消え、俺の飛行魔法は回復していた。
ドッと吹き出る汗を拭いながらも、なんとかナイフをしまう。
気持ち悪いくらいの威圧感に、ありえないくらいの安堵感。
怖いとか恐ろしいとか、そういうレベルの話じゃあねぇな。

「……全部隊へ通達。目標喪失（ターゲット・ロスト）。偵察部隊は編隊を組んでできうる限り追跡。ほかは全部……俺のところに来い」

……俺は、ロクに反抗もできなかった。
かつてＥＣ（エクリプス）因子を発動させていた隼人と対峙した遊騎みてぇに、俺は真正面から戦うことができなかった。
……あいつは強くなったな。隼人が消えてから急に守るもんが増えちまって、それを守りきれるように頑張って、今の力を手に入れた。
飛鳥さんだってそうだ。
隼人がいなくなったぶん、まわりの奴らを気遣ってばかりで……。
結局、俺はなにもしちゃいなかった。
何も、……できちゃいなかった。

「……リック、遊騎に繋いでくれ」

「どうしたん、急にしょげて」

「ちぃとばかし……課題が増えたぜ、俺ら」

「せやな。きばっていこう」

ＥＣ（エクリプス）因子に対抗する手段は３つ。
１つ。魔法を一切使わず、肉体のみで戦う。
２つ。特殊な方法、および武器で生成される限定戦闘を行う。
３つ。ＯＨＮで生産されている特殊魔力弾ＨＭＢを使用する。

現在、これ以外に方法は無い。
……いや、あと１つだけ……ある。
同じくＥＣ（エクリプス）因子の患者となることだ。
まさこれはリスクが高すぎて誰もやらないし、やれないんだがな。

「さあ俺たちは作戦会議だ！　遊騎がきたら巻き込んでやるぞちくしょう！」

対ＥＣ（エクリプス）因子戦闘メンバー

・空牙遊騎
・有栖飛鳥

上記２名

†★†★†★†★†★†★†★†★†★†★

ＥＣ（エクリプス）因子襲撃事件。
その通報は私のところに来ていた。それもわざわざ緊急で、だ。
最近多発しているＥＣ（エクリプス）因子事件を緊急で送るとは何事かと思って見てみれば、それは和輝からの報告だった。
私と共に戦い続け、銃騎士である彼に仕えていた戦友――――大和和輝からの……。
和輝からの連絡は信用できる。いつだって完璧な仔細を教えてくれ

ていたし、この報告書だってそうだ。
でも、問題は……。

「この写真……どう見てもあの子よねぇ……」

長い銀髪、高い身長。この２つの文章と、戦闘中に撮ったであろう本人の写真。
私はこの子をよく知っているし、和輝もこの子を知っているはず。
そういう存在だ。

「飛鳥さん、ちょおいいです？」

「……あら、はやてちゃん。いいわよ」

「おおきに。単刀直入に訊きますが、あの人がこの世界にいる……ゆうん確率は？」

「無に等しい天文学的数字ね。自分で言っていたけれど、一度消滅しているのだし……」

「……死んだ人間は蘇らない。１６年前の事件で、それは立証された……」

「それにあの子がこの世界に返ってくる……返ってこようとする確率も低いわ。元々人に対して執着心の薄い子だったし、自分から満足して消えたんだもの」

私は、あの子が消えた瞬間にいなかった。
でもフェイトちゃんたちによれば、自分の境遇に納得し、受け入れ、そして消えたといっていた。
一度世界に『消滅』を認定された人は蘇ることもできなければ、ほかの世界から『混入』することもできない。それが長年管理局が研究を続けてきた成果だ。
もしもこの写真があの子なら、その現実すらも覆す大事件になりかねないわね……。

「まあ、この件については私が調べておくわ。はやてちゃんには上と掛け合ってもらってもいいかしら？」

「中間管理職は慣れてます。どうぞ」

「ありがとね。それじゃ私は勝手にやらせてもらうわ。……できれば、戦力はそろえておいてね」

「ええ、わかってます。私たちもこのままじゃ……戦えませんし」

そう言ってはやてちゃんは立ち去り、長い廊下に私一人が残された。
冷酷な女、そういう風に言われることは多々あるが、私とて大切に思っていた家族がこうして現れかねないことを危惧していないわけではない。
あの子とは一緒に遊びもした、暮らしもした。だからわかる。

「……この写真は……あの子に間違いない……！！」

膝まである長い銀髪。何者の干渉も許しえない気高き狼。
銀狼――――いえ、隼人。
貴方はまた、私の前に敵として阻むの……？　貴方はまた、彼女たちと戦おうとしているの……！？
貴方が愛し、守ろうとした彼女たちを……また……！

「そんなのって……あんまりよ……！」

愛する人と戦わなくてはならない苦痛を、私は知っている。
愛する人を傷つけなければならない痛みを、私は知っている。
それは、何事にも例えがたい雲雀で、胸をえぐってくる。
とてつもない……痛みなのよ。

†★†★†★†★†★†★†★†★†★†★†★

今日未明、一通の報告書が私の下に届いた。
差出人は飛鳥さんだ。
内容はとても衝撃的で、つい確認の無線を出してしまったほど。

「ＯＨＮ総帥が、この次元に……！」

全次元最大の民間軍事会社『ＯＨＮ』
管理局から質量兵器の所持・使用を許可され、尚且つ管理局ですらその手を借りている超大型組織。
もし管理局とＯＨＮが総力戦を行えば、それは１０日で終わってしまうほど。無論、管理局の敗北は決まっている。
けれど、本当に恐ろしいのはＯＨＮの兵士ではない。その総帥だ。
もしもＯＨＮの全兵士と総帥が戦えば、１ヶ月で決着がつく。勝利するのは総帥……私の兄だ。
実質的戦力は測ることができない。そういわれ続け、どのような組織にも屈しない最強の軍隊。
それが、ＯＨＮ。

「どうして……どうしてこの世界に来たの……？　６年も待って、やっとあきらめられたのに……！　お兄ちゃん……！！」

私の兄は６年前に消失した。
いや、消滅したといってもいい。
これまでずっと心残りだったというのに、やって諦めがつきそうだったのに……。
もう、この気持ちを前にじっとはしていられない。

「なのはにも伝えないと。もし本当なら、終わらない戦争になりかねないっ」

報告が本当ならば、お兄ちゃんは管理局に喧嘩を売ったことになる。
私も、戦わざるをえないから。

対ＥＣ（エクリプス）因子戦闘メンバー

・空牙遊騎
・有栖飛鳥
・フェイト・Ｔ・ハラオウン

上記３名

牙・第1章　忌まわしき過去（後書き）

あとがき

作者　「お久しぶりです。はい、すいません」
フェイト　「……で、ネタバレは？」
作者　「しないって。どうせ暴走するでしょ」
遊騎　「可能性はありだな」
和輝　「やっと俺出てきたのね」
飛鳥　「出番短いけどね。まあ内容も短くて薄っぺらかったけど」
作者　「るせぇ。時間無かったんだよ」
フェ・遊・和・飛　「へーえ……」
作者　「うぐっ……。し、しかたないじゃん！　ここ最近忙しかったんだよ！？　パイプ組んだりレンチが足りなかったり！」
フェ　「……土木作業の人なの？」
作者　「いや、一応物書きだけど……」
遊騎　「なのにパイプ……か。どうせパソコンラックとかそのへんだろ？」
作者　「いや、２メーターくらいの鉄パイプ」
飛鳥　「……わけがわからないわね」
作者　「と、とりあえず……本編の補足、いい？」
和輝　「勝手にしろい」
作者　「あいさ。えー、サブタイトルの冒頭に『狼』とか『牙』とかついてるでしょ？」
フェ　「あ、確かに」
作者　「あれはそれぞれの主観を表したもので、『狼』ならＯＨＮ、『牙』なら管理局、といった具合ですね」
遊騎　「無駄なことを……」
和輝　「馬鹿だな」

作者　「るさい！」
飛鳥　「……とりあえず、収集がつかないから感想返しに行くわよ」

感想返し

空牙刹那　様

作者　「安心してくださいー。今回の主役は『銀狼』ではありません！」
銀狼　「なっ……なんだと……？」
作者　「いたのかよ！」
銀狼　「あ、ああ……まあな」
作者　「……とりあえず、今作の主人公は存在しません」
銀狼　「……ほう？」
作者　「しかし、メインとなるのはいます」
銀狼　「で？」
作者　「メインとなるのは『ＯＨＮ』・『時空管理局』・『謎の影』の３つです。今回個人での主役はいません。組織同士の争いを通じ、原作主人公の変革を主にしていきます」
銀狼　「ほう……今までに無い主観だな」
作者　「んー……まあ。面倒だけど」
銀狼　「駄目作者め。まあいい。俺がここにいる理由だが、個人の存在は決して１つではない。無数にいるのさ」
作者　「うわ、適当な理由つけやがった！」

次回予告

人と人との思いの中。全知全能と言われ、それを拒んだ死神。心を知り、それを受け入れ、全てを死へと誘う魔の魂。

影・第1章　介入

影・第1章　死神と云われし影

「人の悪意と敵意の入り乱れた世界……嫌な場所だ。こんなにも混沌としているとはね……」

僕はさっき、この世界の住人であろう人に出会った。
確かに登場のしかたは怪しかったかもしれないが、まさか殺気を向けられるとは思わなんだ。
この世界の人は少し野蛮なのかな……？

「まあ……僕を知っている人はいなさそうだし、多少本気になっても問題ないかな。ここには彼もいることだし」

僕がこの世界に来た理由は一つ。彼を助けるためだ。
ＥＣ因子（エクリプス）に魅入られてしまった彼を……。
それにはこの世界の情報が欲しかったんだけど、もうそこらじゅうで報道されてるね。ＥＣ因子（エクリプス）発症者を発見――――って。
あれは厄介なウイルスだ。僕でさえ完全抹消が出来ない。まあ作ったのは僕の友人なんだけどさ。

「さあ、行こうか。早く彼と――――この世界を安定させなきゃ」

黒い一対の翼を出し、僕は森林から飛び出た。
僕は死神。それは比喩表現ではなく、実際にそうだ。

死を届けるからではない。僕は死後の世界――いわゆる『あの世』で生まれて名を馳せてはいたけれど……まあ色々あってね。今のところ、僕はただの敵になるのかな？誰を基準かは知らないけれど。もう一度翼を羽ばたかせ、魔法を組み合わせて瞬時に別世界へ移動する。あの気配は探しやすい。死にたての死体みたいな、全く意欲が無くて生気が微かに感じられるあの気配。
言い換えれば、僕が殺した人たちの気配と同じ感覚だ……。

「やあ、久しぶりだね。君と会うのは２６年ぶりかな？」

「……貴様は……」

「覚えてるかな？　……いや、覚えていないだろうね。君と会ったのはほんの数秒だ」

「……失せろ。今は誰とも……会いたくない」

「そうもいかない。僕は君を止めなくちゃ」

「……そう……か」

【敵性生命体確認。排除行動を実行】

「なっ――――ッ！？　……これはこれは……不思議なものだね……！」

突如現れた魔導書。
それが鼓動をなしたかと思うと、僕の内臓がことごとく荒らされて

いた。
相手の体内を操作する魔法……？　そんなもの聞いたことが無い。
……っていうか、僕じゃなかったら死にかねないよ……。

「……無傷、か」

「お生憎様。こっちは頑丈なものでね」

「こいつの排除行動を凌ぐとは……貴様、人間か？」

「いーや残念、死神だ」

「……神、自らを神と云うか。言い得て妙だな」

細くて真っ黒いバイザーと、それにつながった顎まである仮面（のつもりか？）を付けた男。この人こそ、僕が探していた人なんだけど……。
なんだか、嫌な感じだ。
僕を見ているのに見ていないような、見ようとしていないような……。

【甲の抹殺を提案】

「提案を考慮。……全力での戦いを所望しよう」

「……いいよ。やってあげる。君が死んでも責任は取れないけどね」

男は魔導書を投げ捨てると、男は空に舞い上がった。
ロングコートの右袖がそのせいで揺れていたけど……今の揺れ方、なにかおかしい。まるで関節の無いまっすぐなものが入っているような、不自然な袖の揺れ方だった。
いつまでも下から眺めているわけにはいかないので、翼を羽ばたかせて空へ追いかける。

「……行くぞ」

「ああ。第1門、完全開放」

刹那。
1秒よりも短い時間で、僕を黒いマントが包み込んだ。
武器は人斬り鎌（デスサイズ）。武具は髑髏の仮面。故に死神。
……というより、これそのものが僕の姿なんだけど。

「奇怪な姿だな」

「まア……ネ。だからッて手加減ハしないヨ」

「そうしろ」

男が左手で空を切ると、鋭い風斬り音と共にマントの端が切れていた。
見えない剣（ツルギ）……？　嫌だね。幻想の宝剣（イマジンブレード）を見るのはこれで2度目だ。

「アあ、良い剣ダね」

「……そう思うか……？」

「少なクとも、僕の死人（デスサイズ）の怨念と斬りアえるんじゃなイ？」

「……そう、だな。その切れ味、触れることなく感じるさ」

「なラ始めよウじゃないか」

ガァンッ！

低く轟く金属音。決して激しくぶつかり合ったわけじゃない。ただお互いの斬激がぶつかっただけのこと。

ほんの少し……数センチ刃先を動かして生まれた斬激同士が、ね。

「防いだか」

「遊ビかイ？」

「……いや、小手調べのつもりだったが……よもや遊戯と間違えられるとはな」

「ハハッ。君らしいネ。でも手加減はデキナイ！！」

長い柄を利用して鎌を高速回転させ、刃先の速度を音速から光速へ

向かわせる。
どれほど早い物質も、どれほど硬い硬質も、この鎌の前では無意味。
全てを切り離すこの鎌ならば、見えぬものでも存在せぬものでも、
全てを刈り取ることができる。
けれど、やはりそう簡単に隙は見せてくれないね……。

「EC因子（エクリプス）ノ方は抑えられテいるのカな？」

「そこそこだ。奴の意識が6割程度……自我が負けている」

「凄いネ。常人なら死ンでいるのに」

「俺は人ならざるものだからな。この程度はどうということないが
……」

「謙遜しなくてイい。実際に凄いんだカラ」

「……そうか。なら、この攻撃は予測できるか？」

彼が左腕を振った瞬間、斬撃ではなく銃弾が僕の体を貫いた。
おや……？　おやおや？　なんでかな？　しかも後ろから……。

「コレも君の攻撃カい……？」

「……知らん。俺はまだなにも……」

「……邪魔が入りソうだ。これデ失礼するよ」

「またの機会に戦おう」

「あア」

一瞬でその場を離れ、先ほど銃弾が飛んできた位置を地面から計算する。
角度的にはこの先だけど、はたして犯人はいるのやら……？

「いてクれると、説教ノ１つでもでキるんだケど……」

別段、僕は怒っちゃいない。でも戦ってる最中に横入りされるのはたまらなく嫌いだ。
それだけわかってほしい。

『命中は確認……その後の追跡は不可能』

『だな。次の現れる可能性も高いし……閣下を観察（スネーク）するぞ』

『同意（ジャッジ）。任務続行……』

……たまらなく怪しい人たちがいた。
１０メートルほど先に、若そうな男女２人組み。歳は１７……くらいかな？
それにしても物騒だなぁ。１人はアサルトライフルを改造した狙撃

銃まで持ってるし、もう一人は多機能型の双眼鏡とサブウェポン多数……。
怖いねぇ、全く。
しかもギリースーツ半脱ぎと見慣れない軍服かぁ。

『対象（ターゲット）に動き無し……』

『全周囲警戒に移る』

『了解』

「おわっト……」

ライフルを構えた男がこちらを向いたので急いで木に隠れ、デスサイズを消して様子を伺う。
ただでさえデスサイズはでかいし、今は骸骨がマントを被ってるような格好だ。怪しさ２００％超えだろう。
見つかったら射殺されかねないよこれ……！

『？　……今、声がしなかったか？』

『した。５時の方向……１人』

『見てくる』

「……終わっタね、こりゃ」

『まただ。いるんだろ、出て来い』

ありゃ、完全に見つかってるね。
諦めて木陰から出て、両腕を上げて敵意が無いことをアピールする。

「……やぁヤあ、こんニちは。決して不審者じゃナいよ？　本当だヨ？」

『いや、不審者感丸出しなんだが……』

「……本当……だヨ？」

『……』

「……」

『……』

『……拘束』

「ヒぃっ！？」

女の子が小さく呟くと同時に男は銃を投げ捨て、ナイフ片手に走ってきた。
怖いって畜生！　なんで僕の言葉を信じてくれないのかなぁ！？

「ちょっ、やめロって！」
「んなッ！？」
ナイフを避けて腕を掴み、体ごと地面に叩きつける。
おー怖い怖い。刺さったら痛いよあれ。
いやまあ、すぐ治るけど。
「は、速ぇ」
「いや、遅いでショ……。時速２０キロ無かったヨ？」
「流石閣下とやり合うだけのことは……」
「……嗚呼、やっぱリ見てたンだ。さっき撃たれたしねぇ」
マントの下から背中に手を回し、防具用の外骨格で止まっていた弾を投げ渡す。
この装備は人の骨格標本みたいなもので、まあ見た目は骸骨だ。一応僕が入ってるわけだけど、特殊な偏光で見えなくなってる。
骸骨人形の完成さっ！（ｏｒｚ）
「これ、返すよ。僕はいらないし、必要も無いから」
「……弾ぁ食らって平然と返した奴、お前が初めてなんだが……」

「ＨＡＨＡＨＡ。人生色々あルさ。……さて、とりあエず僕はね？
これヲ撃った君たちをちょろーっト説教したイんだ。結構痛かっタんだよ？」

なんかこう……トスッ！　と来る感じでさ。

「ト、いうワケで……Ａｒｅ　ｙｏｕ　Ｒｅｄｙ？」

「え……ちょ、まっ――――」

「なんで私まで――――」

「レッツ、説教タァイム！」

……。
その後、説教は４時間続いた。

†★†★†★†★†★†★†★†★†★†★†★†★

「……さて、これで僕の痛みヲ理解してくレたかな？」

「はい……すいませんでした」

「……誤る」

「うん、素直なのハ良い事だヨ。でもどうして……増援がいるのカな？」

説教も終わり、ひと段落着いたところで僕の右肩のあたりで何かが爆ぜた。
反応炸裂弾かな？　まあ、死神姿の僕に何をしようが、普通の攻撃は何一つ効かないけどね。

「無駄ダよ。僕に銃ハ効かない。君たちならそレ以外の方法もアるんじゃなイかな？」

『……先刻、閣下と戦闘を繰り広げていたようにお見受けするが』

「アあ、そうダね。今ジゃ彼は閣下だ。そして審判者であり……僕は死神だ」

『……下がれ、チーム・ホース』

「「……了解」」

僕を撃った2人が1歩さがり、武器をしまった。
おいおい……完全に警戒解いちゃってるよ……。いいのか？　僕がいるのに。

「私の部下がとんだ失礼をした。侘びをしたい」

「……おや、随分と……芸達者な隊長さんだ」

全身に包帯を巻きつけ、その上から迷彩服を来た面白い人。
右目しか出ていないのも面白いけれど、何より拳銃ばかり何丁も持っているのが面白い……。

「私の名は村雨。見ての通り手負いだが、こいつらよりは有能だと思ってほしい」

「みたイだね。警戒ノ仕方がまルで違う」

「……気配探知、かね？」

「少し違ウかな。僕からシてみれば、君たちの『気』自体ガ可視性なンだ」

「人の『気』を見る……？　不可思議なものだ」

「だネ。人にとってはソうだ。……僕はそロそろ帰りたイんだけど、イいかな？」

「……すまないが、そうもいかないな」

動きこそ無いが、その気配は確実に僕を射抜いていた。
おお怖い怖い。殺気が凄いね。これじゃ……逃げられそうも無い。
まあ、さっきの彼ほどではないけども。

「……見逃しテは、くれナい？」

「……言葉は無用と申し上げよう」

「……そウ。少シ、悲しイよ」

こうして敵意を向けられ、戦いが避けられない以上……やるしかない。
僕は元々、あまり戦いが好きじゃない。できれば誰も傷つけず、平和的に解決したいと思ってる。
それが故に手にした力だ。……というより、それが故に与えられた生、かな。

「君ノ、名ハ？」

「村雨（ムラサメ）・Ｏ（オー）・閃雷（センライ）。ＯＨＮ総帥より頂しこの名に懸けて、誇り在る戦いを所望する」

「……僕ハ、死神。死を恐れル人に絶望を、死を崇メる者に断絶を、光亡キ人に闇を送ル……先導者ダ」

「先導者、か。良き響きだが……邪悪な念を感じる」

「そうダね。僕ハ悪だ。デも……闇ノ中にも光があルことを教えてあげよう」

僕はデスサイズを構え、閃雷は腰を落として両腕を構えた。
なんだ……？　徒手格闘でデスサイズを防げると思っているのか……？　無駄だ、デスサイズは素手で防げるほど鈍らじゃない。

「……本気かイ？」

「ああ」

「……そウ。ナら、手抜きはシないよッ」

デスサイズの柄を持ち変え、ゆっくりと……徐々にスピードを上げて回転させていく。
刃先は徐々に速度を上げ、終には———音速をも超える。
断続的に発せられるソニックブームとヴェイパーコーンを弾けさせ、僕は右手だけでデスサイズを回転させ続けた。

「……寄らば斬る、ということか」

「違ウよ。寄らズとも斬る！」

———ジュァッ！

鈍い、金属同士が響く轟音。それと共に高速回転していた刃は唸り

をやめ、閃雷に向かって一直線に飛翔した。簡単な話、柄が細かく分裂し内蔵されたワイヤーで長さを調節できるようになっている。ちなみにデスサイズは鎌ではない。多形態型融合武器という新カテゴリー。剣・鞭・槍・鎌・斧の5つに変化する、万事に対応すべく僕が開発した宝具だ。
効果としてはまだ明かせないが、死神らしいということだけは言っておくよ。

「無駄だ」

「ナッ！？」

眼前まで迫っていたはずの刀身は急に角度を変え、閃雷の横を素通りしてしまった。
……ありえない動きだ。まるで光の角度が変わるみたいに……。

「……そウか。君、光の屈折を操っテいるね？」

「今の一撃で見破ったか。流石は閣下とやりあうだけの腕は在る」

「わカりやスいんだよ。弾かれたのなら柄（ロッド）も曲がるはずなのに、君の近クに行った瞬間そコだけが曲がっていた。これは光の屈折と考えルのが妥当じゃナいかな？」

「……流石だ。もう子供だましは通じないな。正々堂々、正面からお相手しよう」

閃雷がファイティングポーズをとると、腕の周りに風の流れができていた。
なんらかの魔法か……それとも、特殊な波動か。なんにせよ警戒すべきであることに変わりは無いんだよなぁ。
嫌だね。こんな自然の法則を無視されたものを見せられたら……殺さなくちゃいけないじゃないか。

「……ごめンよ。でも、さようならだ」

「参る！」

「――死を運ぶ闇（デスサイズ）・根源の刹那（ヘルダイバー）……」

小さく、僕だけにしか聞こえないように呟く。
同時にデスサイズは姿を消し、螺旋状の衝撃波だけが閃雷に向かって駆け出した。音速を超え、人の反応を許さぬ速度へと。
だから……これで、終わ――
パァンッ！
……り、だ？

「……すまんな。こいつらを殺させるわけにはいかない」

見えない剣。
さっきまで戦っていた彼が、そこにいた。

「……ソう。今のアれを、防いだンだ……？」

「……ああ」

「凄イね。ウん、凄いヨ。ナら、こレで消えてくれルかな」

デスサイズなき右手を空に掲げ、再び小さく呟く。
全てが無に帰る刻（クラウディオ・クラウディア）――――――

影・第1章　死神と云われし影（後書き）

作者　「……えー、更新がどれだけ放置されていたか、忘れました。一応書こう書こうとはしていたのですが、中々すすまず……」
遊騎　「死んで来い」
作者　「うぐっ……。返す言葉も無い」
和輝　「それよか、なんでこんな遅れたんだ？」
作者　「……いや、ちょっとね。不幸が続いてなんやかんやでさ」
遊騎　「いや書けよ」
飛鳥　「そうね」
作者　「……はい、すいません……。えー、今後も更新は続けていきます。この小説の更新を待っていてくれている人もいると信じて！　ね！」
和輝　「いるのか？」
作者　「言わないで！？」
和輝　「いないよな」
作者　「……はい。次回の予告を簡単に。えー次回は狼編へ戻ります。3視点から描かれるこの本編ですが、非常に難しいです。時間軸がバラバラですしね」
飛鳥　「読めるように描きなさい？」
作者　「はい。では次回、また会いましょうぞ」

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n2087x/

魔法戦記リリカルなのはＦｏｒｃｅ～世戦の軌跡～

2011年11月23日19時53分発行